



登下校の交通マナー向上のために



柏市立田中小学校教諭 こたき ゆうこ 小瀧 悠子

今年度、私は生徒指導主任を務めている。本校では「子供が急に飛び出してきた」「保護者もいるのに一緒になって道路に広がって歩いている」など登下校の交通マナーの問題が多い。その度に注意喚起のメールを流し、指導をするもの一向に良くならない。

この度の「千葉教育」蓮号の子供の横断判断能力は興味深いものであった。30km以下の低速車両に対する「まだ渡れる。」という誤判断率が60%以上の割合が、データをとった2年生・5年生において3・4割存在するという事実である。

柏市では関係機関と連携し、毎年通学路の点検や対策を行っている。その取組や地域、保護者の方々の見守りにより安全は改善されている。そこで大切なのは子供達自身の意識改革である。これまでも私たち教員は横断の誤判断が多いことを念頭に「自分の命は自分でしか守れないこと」や「交通事故は他人事でない」という視点をもって指導してきた。その他にも毎年柏市で実施している警察官による全校交通安全教室、2年生の生活科や3年生の社会科の地域にかかわる活動、4年生の地域の安全を守る活動等も行ってきた。今後はさらに横断の誤判断を防ぐために、実際の危険箇所と同じ状況を作って練習する等、交通行動の具体的な指導が必要であろう。子供達を見守ってくださる地域の方々へ恩返しをするためにも根気強く活きた指導を続けていく。

分からないことだらけの毎日から



習志野市立東習志野小学校教諭 なかだい ちひろ 中台 千尋

教師19年目にして、初めて「ことばの教室」通級担当となった。恥ずかしながら「ことばの教室」で、どんな指導をしているのか、全くの無知であった。

そうは言っても、児童は通ってくる。夕行がカ行に置換し、自分の名前が言えなくて悩んでいる児童。子音が抜けてしまい、何を話しているのか相手に聞き取ってもらえない児童。吃音のため、自己紹介することが苦手な児童。通常学級での指導は役に立たなかった。

そんな中、言語通級新任担当者研修が始まった。様々な指導の手立てが紹介され、「これはAさんに合いそう。」「これはBさんにやってみよう。」という具体的な技術をたくさん知ることができた。構音障害の児童はそれぞれ困っている音によって指導が違い、吃音の児童は全く別の指導だった。日々の実践の中で、ことばの教室の奥深さと難しさを知っていった。分からないことだらけだったので、新任担当者研修は、毎回楽しみだった。新しい情報を得て、それを指導に生かし、児童が変化していくということは、幸せなことだ。

吃音指導の講座の中で「努力してもどうしようもないことは、誰にでもある。」という話があった。吃音は回復を目指さない。吃音と共に生きる力を育てていく指導だ。それは、吃音に限らずどの児童にも必要な力である。分かっているようで、分かっていたことだった。これからも学び続け、児童に寄り添いながら指導をしていきたい。